

ピリピリミサカ

ADULT ONLY





一時間前

あっ!!

見つけたわよ
この野郎っ!!

ん…?

ぼっ

今日という
今日こそは
決着を…

あー…っ
そーいえば

オマエの能力って
故障した冷蔵庫とか
直せたりするの?

冷蔵庫?

あ…

場合によるけど
電化製品なら
なんとかなる
…かも?





あははは
ははー……

ゴメン
ちよつと
電圧ミスった
かも……

いや……どうせ
元から壊れてたん
だから気にするな
ビリビリっ



だから
言ってるだろ

御坂はワザと
壊したんじゃ
ないんだから
気にするなって



御坂っ
とりあえず
なにか飲むか？

えっ？



でも……
トドメ刺したの
私みたいだし

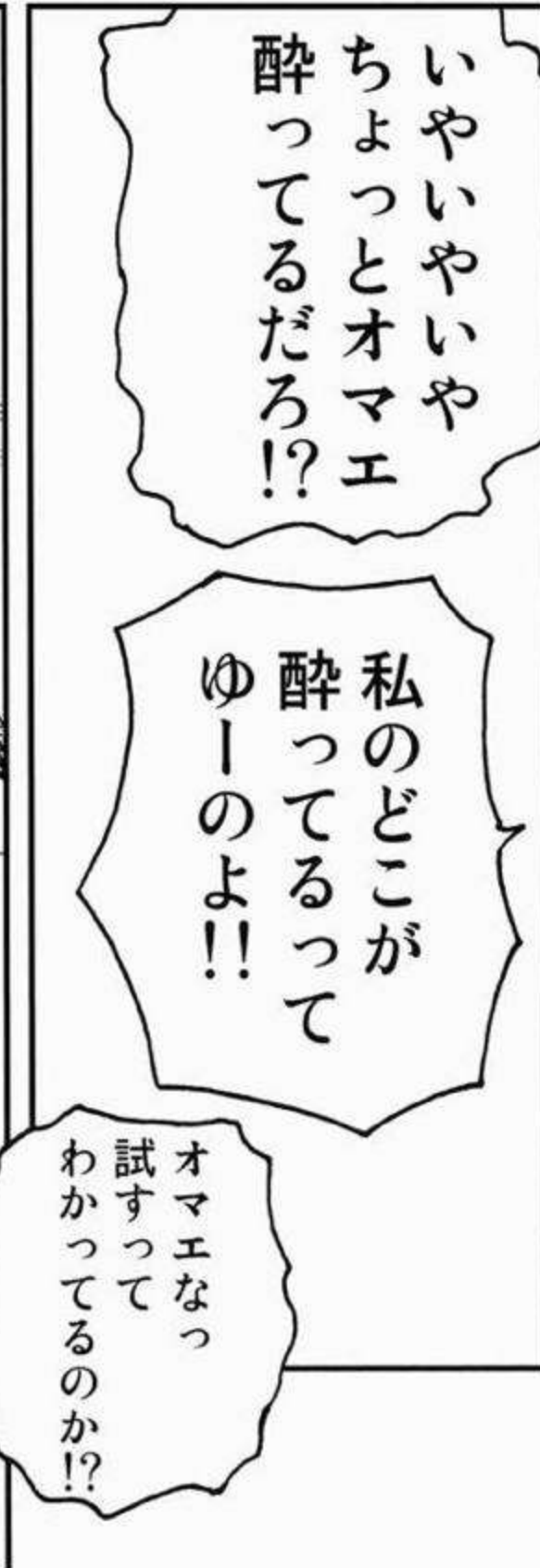
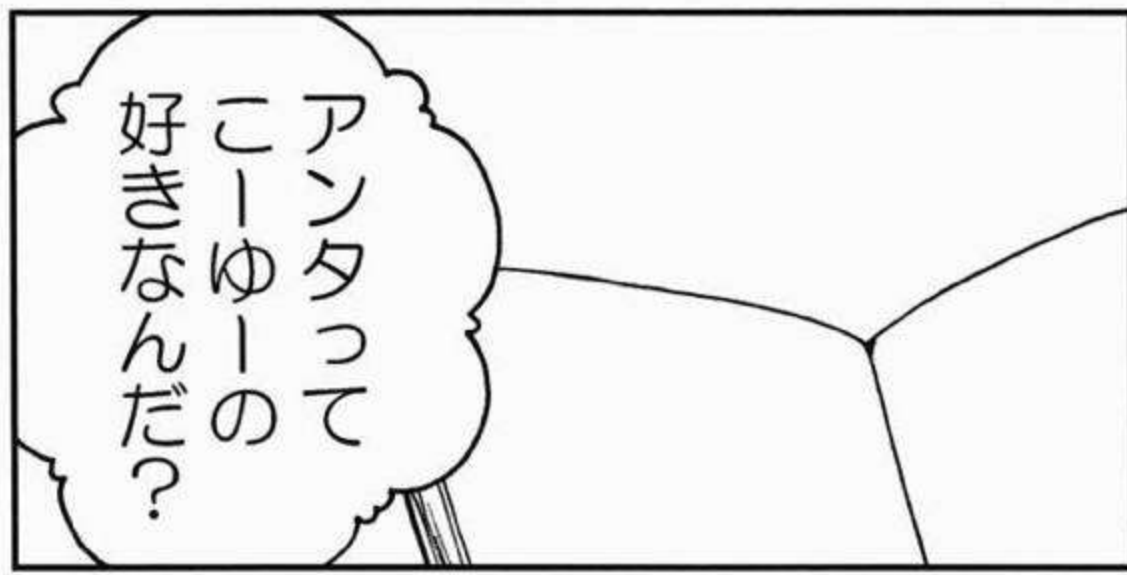
新しいの
弁償して……

ぽんぽん

不幸だ！！









みたいなコトを
言ってた気が...

それから...
えーっ...と
...ん?

なにが
どうなって
こんなコトに!?

あーっ

あ



えー...と

ぶるぶる

なにか
すっごく
恥ずかしいコト
されてたような...

やだ...っ
考えが
まとまらない



どうした美琴?
さっきから
動きが止まってるぞ

くちゅ

びい



かあああ

な……っ

……

なによ
イキナリ
美琴だなんて



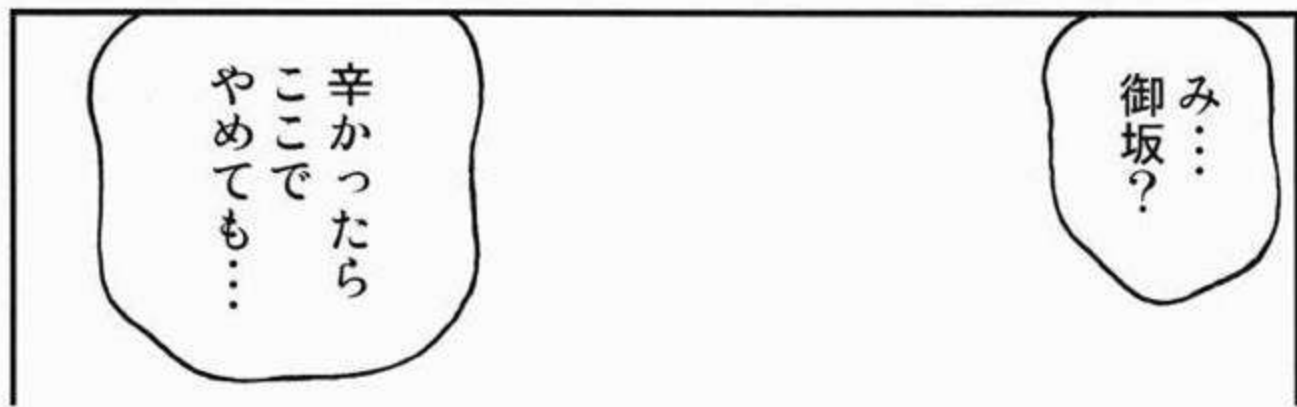
たたら
たたら
たたら

もしかしてコイツ
こんな時に正気に
戻ったんデスカ!?



なに
言ってるだよ

オマエが
美琴がいいって
言っ……



み……
御坂?

辛かったら
ここで
やめても……

なっ…
なに言ってるんよ
バカっ!?

ぶる
ぶる

ここまでしておいて
途中で放置なんて
しないでよねっ!

ま…だ
大丈夫なん
だか…ら

あっ

びしょ
びしょ

びしょ
びしょ

びしょ
びしょ

びしょ
びしょ

びしょ
びしょ



ね...だから
このまま続けてよ
当麻っ

全然
大丈夫でしょ...

ほ...ら

美琴...

ふぁっ

びん

びん

びん

さっきまでの
酔ってる美琴も
可愛かったけど

ぶるぶる

今の美琴の方が
すごく可愛いな

んっ

な...なに
調子のいいコト
言ってるのよ

いつも
まともに相手
してくれない
くせに...

いっか
ぬま

あ
あ
あ

ガ
ガ

わ…
私がいつも

どんな思いで
いたのかも
知らないくせにっ

なんだ美琴？
いつもこうして
欲しかったのか？

な
あ
っ

そ…っ
そんな訳
ないでしょっ!!!

ハッ

うわっ!?!
オマエ
こんな時にっ!!

そんなコト
言われてもっ

私だって
放電なんか
するつもりは

危なっかしい
ヤツだな…

や…だっ
止まんないよお

やっやっ

ほらっ
これでもう
大丈夫だろ？

あじ…

わしゃ



落ち着いたな？
じゃあ続けるぞ
美琴っ

ん…っ



ん…っ

アッ

アッ



ガクガクッ

ふあ

ああ

ズズ

ジグザグ
ズズ



あッ

アッ

アッ

ググ

ほら…
またバチバチ
言ってるぞ

ががが

ががが

それが
治らないと
俺以外のとき
どうするんだよ

ふいあ

い…いいじゃない
なんでそんなコト
言うのよっ!!

どうせ当麻としか
こんなコト
しないんだからっ

だからちゃんと
責任取りなさいよっ

そうだな

もう少し
美琴が電流を
抑えられるように
なったらな



な...によ
そんなに私のコト
イヤなら...っ



なにを
勝手に勘違い
してるんですか

美琴が慣れるまで
毎日でも
やるからなっ



超能力者になる
努力に比べたら
楽なもんだろ？

ふい
あ

ほら

イクゼ
美琴

ふい
あ
あ

あ
あ

チユッ

チユッ



ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

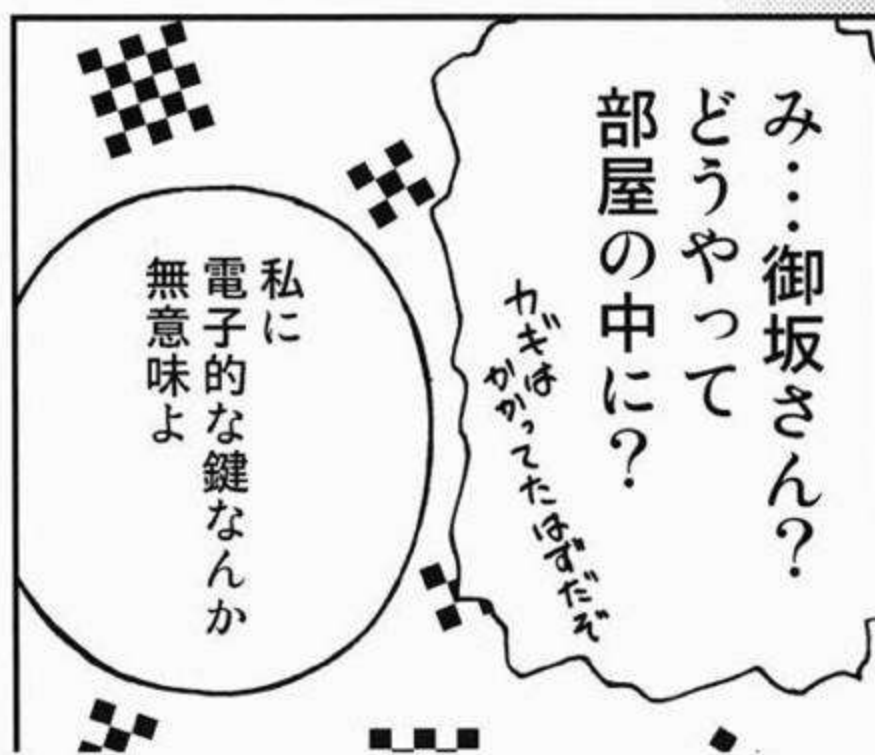
ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

ガッ
ガッ
ガッ

はあ





とある土曜の昼下がり

ある日、部屋に帰ったら、御坂さんがベッドに転がってしました。

「えつとー、これはいったいどういったイベントで？」

目の前に広がる光景に、思考を放棄したがる頭を無理やり回転させて、上条当麻はかろうじて首をわずかに傾けた。

何がどうしてこうなったのかはわからないが、彼の愛用のベッドの上にはレールガンこと御坂美琴が気持ち良さそうに寝息を立てていた。

無断で部屋の中に入ったことは今さら何も言うつもりはないが、だからといってどうしてわざわざ他人の住居で寝コケているんだコイツは、と溜息混じりに思う。

こうして家に帰ったら美琴が寛いでいた、なんてことは日常茶飯事だし実害もないので特に咎めることもしない。それに一応、彼女とは、……まあ、そういう仲なわけ。

いつも特別に会う約束をしているわけではないから彼女の来訪はいつも突然で、気が向いたときに勝手に勝手にふらつとやってきては、構えとねだる感じだ。そして構いすぎると怒るくせに構わなさすぎると拗ねる。まったくもって気まぐれな猫みたいな奴だと、当麻は思っていた。

その気まぐれな猫様は、どうやら当麻のベッドがいたくお気に召したらしく、起きている間は大半かわいくない顔を彼に向

けるにもかかわらず、今は至極満足そうに頬を緩めている。その表情を見ていると、まあしょうがないか、くらいには思えてくるから、人間の順応能力はたいしたものだ。

彼はふと手に持ったままだった鞆に気づき、視線をそれに移した。学校指定の通学鞆。ついでに着ているものは少々気崩された制服だ。

土曜日だというのに補習に駆り出されていた当麻は、やつのことで解放されてへろへろになりながら自分のアパートに帰ってきたところだった。

もう一度視線を少女に移すと、彼女もまた制服に身を包んでいた。美琴が補習を受けたなんてことは聞いたことがないから、そこそこ勉強はできるのだろうが、ならばなぜわざわざ制服なんだろうかと考え、すぐにどうでもいいかと諦める。美琴が制服で来たいと思ったから、制服を着ているにすぎないのだ。きつと。面倒くさいからそういうことしておく。

寝乱れた胸元からはわずかにブラジャーのピンク色が覗き、慌てて視線を逸らした先では、すらりとした形のいい脚がミニスカートから伸びていた。その下に短パンを穿いていることを知っているが、それでもなお、まともに見てしまった当麻の心臓がギリりと冷や汗をかく。

「あー、まあ、こういうこともあるか……？」

そこからも視線を逸らした当麻は、誰が聞いているわけでもないというのに、ごまかすように呟くと、なぜかげっそりと疲労感を漂わせながら、とりあえず荷物を降ろした。

無駄に辞書類持参を強要された彼のカバンがドサリとけっこう大きな音を立てて床に落ちたが、彼のベッドの上で主よろしく気持ちよさげに寝入っている少女が目覚ますことはなかった。起こさずに済んだことに、ほっと息を吐く。

「どんだけ爆睡してんだか」

苦笑しながら胸元のボタンを2、3個外し、水を飲むべくキッチンに向かった彼は、そこでコンロの上に朝には置いた覚えのない鍋が鎮座しているのを見つけ、怪訝に思いながらも蓋を開けてみた。

「へえ、メシ作って待っててくれたのか？」

当麻が感心したように呟く。

鍋からは食欲をくすぐるスパイスの香りが漂ってきて、まだ昼食を摂っていなかった彼の腹が素直に鳴った。

男の部屋に来て披露する手料理がカレーとは、いささかパンチに欠けるが、カレーが嫌いな人間もそうはいないだろう。まずまずのチョイスだ。空になっていたはずの炊飯器にも保温の表示が光っている。

「悪いことしちまったな」

まさか美琴が部屋にやってくるとは思っていなかった当麻は、例のごとく週末の予定を彼女に告げていなかったのだ。

鍋の中のカレーは手が付けられた形跡はない。炊飯器の中も確認したが、やはり平らな表面を保ったままだった。

ということとは、美琴も昼食はまだだと考えたほうがいいだろう。状況的に、これは明らかに昼食用に作られている。

これは起こしたほうがいいかと思つて、当麻は眠る美琴に声をかけようとし、寸前で不自然に動きを止めた。

不意に、良からぬ思考が脳裏に浮かんだのだ。

ごくりと唾を飲み下した彼は、顔を彼女の整った顔にゆつくりと近づけていき、一瞬ためらったあと、そつと唇を重ねた。

そのとき、美琴の唇からわずかに声が漏れて当麻は焦ったが、どうやら起きたわけではなさそうだ。

彼はそつと彼女のニットごとシャツの裾を捲り上げ、再び生

唾を飲んだ。瑞々しい肌に映えるいささか少女趣味なピンク色のブラジャーが小振りな乳房を覆っている。衣服に隠されて日に焼けのない部分の肌は白く、肌理が細かくて、不思議と吸いつくような感触がした。

「んっ……」

当麻の掌が平らな腹を撫でると、美琴は鼻にかかった甘い声を上げ、艶を帯びたその響きと幼さを残す外見とのギャップが、彼の体内に流れる血液量を増やす。

「美琴」

彼は心なしか掠れた声で彼女の名を呼び、滑らかな肌に舌を這わせた。

くすぐったいのか、はたまた感じるのか、彼女の身体にわずかに力が入る。

「ん……あ……」

意識がないままに身を振る彼女の身体を押さえつけ、舌で舐め上げると、彼女の身体がビクンと跳ねた。

白かった肌は上気してわずかに桃色に染まり、何かに耐えるように眉が悩ましげに寄せられている。薄く開いた唇からは無防備な甘い吐息が零れ落ち、彼女に年齢以上の妖しい色香を添えていた。

喉を鳴らした当麻はピンク色のブラジャーのホックを外し、上に押し上げた。すると、色づいた二つの頂が突然晒された外気に打ち震えながら彼を誘う。

「なんだよ、もう勃ってんじゃねーか」

彼は躊躇うことなく頂の一つに唇を寄せ、舌で転がした。「んっ」

感度のいい美琴の鼻から甘い吐息が抜ける。

反対側の乳房も掌で押し潰すように回し、肉を掴んで先端を

刺激する。小振りではあるが、明らかに男にはない柔らかさを持つそれに当麻の興奮が煽られる。初めは焦らすように緩慢な動きで愛撫していた手は、いつの間にか自らの昂りに急かされて性急に美琴の胸を揉みしだいていた。

「ん……え……と……ま？」

「あ」
ぼんやりと目を開けた美琴と視線が絡んだが、彼は今さら身体の熱を鎮めることなど不可能であることを悟り、先手必勝とばかりにまだ寝ぼけている様子の彼女の口を唇で塞いだ。

「んうっ!? んーんー!」

さすがに覚醒した美琴が当麻を引き剥がそうと暴れたが、その細い両腕を彼女の頭上で纏めて片手で押さえ付ける。その間も胸を弄る手は止めず、さらに硬度を増した乳首を爪先で軽く引つ掻けば、彼女は身体を震わせてくぐもった嬌声を上げた。

かわいい女の子を組み敷き自分の支配下に置いているという事実、当麻の中の征服欲が刺激される。普段は散々彼を振り回す美琴の自由を、逆に彼が完全に支配している現状は、意識すればとても甘美で中毒性のある毒のようでもあった。強い麻薬に頭が侵され、彼女を意のままに貪りたいという衝動のみが彼を衝き動かす。完全に主導権を握り、彼女を快楽に啼かせてみたいという欲求が、彼の精神を埋め尽くした。

狭い口内にぬるりと舌を差し入れれば、彼女は一瞬ビクリと固まり、すぐに頭を左右に振って逃れようとする。しかし戸惑う舌を執拗に追いかけて絡め取り、逃げた罰を与えるかのように強く吸い上げれば、彼女の目尻に滴が結んだ。

唯一自由になる脚で遠慮なく蹴り上げてくる美琴に眉を顰めた当麻は蹂躪していた口を解放し、そのまま唇を彼女の耳朶に触れさせて、彼女が弱いと知っているわざと低くした男を感じ

させる声を吹き込む。

「おとなしくしてろ、美琴」

その直後、彼女の抵抗がぴたりと止んだ。いや、抵抗を止めたというより、全身を硬直させていると言ったほうが正しいだろうか。彼女の頬は薔薇色に染まり、心なしか瞳も潤んで揺れている。

「……バカ当麻」

やがて拗ねた響きを持たせた言葉が一つ零れ落ち、それ以降彼女が彼を拒む態度を見せることはなかった。当麻自身が驚くほど、効果はてき面だった。

「いい子だな」

当麻が美琴の頭を撫でてやると、彼女は目元を赤く染めたまま視線を逸らしたが、あえて彼の手を振り払うことはしなかった。この行為を実は美琴が気に入っていることを彼は気づいていたが、甘やかされることに慣れていない彼女が素直になれないのもわかっていたので、彼もわざわざ口にすることはしない。

「子供扱いしないでよ。そんなに歳、変わらないんだから」

「はは、そうだな」

こうやって拗ねるところはまだ幼いと彼は思ったが、そんな部分もひっくり返るめてかわいと思うくらいには気に入っている。そんな彼女をもっと見たくて、わざと意地悪してしまうのもいたしかたないことだ。

彼は悔しげに引き結ばれた柔らかな唇に触れるだけのキスを落とすと、彼女の太腿に手を滑らし、短パンのファスナーを下ろした。

「え? とどうまつ!」

「悪いな。俺もゆつくり時間をかけて抱いてやりてえけど、そういうわけにもいかねえんだろ?」



「え？ どういう……あつ！」

素早く短パンを抜き取った当麻が下着越しに秘部に触れ、喉の奥で笑う。

「濡れてる」

わざと状態を教えてやれば、彼女は真っ赤になって焦り、泣きそうになりながら羞恥に唇を噛んだ。

「あ、アンタがいろいろす、するから、じゃない……！」

拗ねる彼女の額に軽くキスを落とすと、当麻は下着ごと指をぐつと押しこんだ。

「あつ！」

彼女の太腿がビクリと震え反射的に閉じそうになるのを、彼は自らの身体を滑り込ませて阻止する。

「つまり、俺の愛撫に感じてくれてたってコトだろ？ それって、すげえ、うれしい」

当麻は押さえつけていた手首を解放し、充血して震えるかわいらしい胸の頂を撫でながら、もう片方の指で割れ目に下着の布を擦りつけていく。

「ふあ、……あん、やあ……っ！」

言葉では拒むものの、彼女の若い身体は完全に当麻の愛撫を受け入れ悦んでいる。薄布は彼女から溢れた粘り気のある液体を存分に吸って、敏感な皮膚に張り付いていた。湿り気が当麻の指にまで届く。

「嫌なわけねえよな。美琴は恥ずかしく責められるのが大好きなんだから」

「ばっ……！ ちが……！」

「だから、恥ずかしいところを俺にじっくり見られたら、もつと感じちまうんだろ？」

楽しそうに言うと、彼は水分を吸っていくぶん重くなった下

着を抜き取り、美琴の太腿を掴んで目の前で大きく脚を開かせた。当麻の目の前に、美琴の濡れてぷくりと厚みを増した秘部が露わになる。さらに脚を左右に開けば、陰唇に隠されていた赤い隧道の入口までもがよく見えた。

「本当にエロいよな、美琴は。こんなにヒクヒク恥ずかしい肉をヒクつかせて。そんなに欲しいんだ？」

じわりと涙を滲ませた美琴が首を左右に振る。

「ほら、蜜が垂れてきてるぞ？ 見られただけでイク気か？ しようがないヤツだな」

わざと意地悪な口調で彼女を責めると、強い女の匂いを漂わせるその場所に吸いついた。

「ひあつ！ やだああつ！」

反射的に閉じようとする脚の力に当麻は薄い笑みさえ零し、芳しい蜜を溢れさせる秘裂に舌を差し入れる。

舌尖を尖らせて隧道の内壁をくすぐれば、美琴は腰を激しく振って身悶えた。彼女の快感を彼に伝えるように、媚肉が舌の付け根を容赦なく締め付ける。それを宥めるように、当麻は舌を隧道から快樂に震える媚肉に移すと、舌と唇を使って愛撫をした。表面にべったりと付いた蜜を丹念に舐め取り、充血して厚みを増した敏感なその肉を唇で食んでは舌尖で刺激する。感じる箇所をしつこくかわいがってやれば、キレイに舐め取ったはずの蜜が再び溢れ出し、当麻の口周りを汚した。その間も、次第に間隔が短くなっていく脈動が直接彼の皮膚に、彼女の昂りを伝える。

当麻は美琴の羞恥を煽るために再び大きく股を開かせ、それにより露わになったぷくりと膨れた花芽に強く吸いついた。

「やあああ——っ！」

腰を大きく跳ねさせた美琴が悲鳴を上げて激しく頭を振った。

伸ばした腕が当麻の髪をぐちゃぐちゃに掻き回し、強い静電気に触れたときのような痛みが彼の耳元で弾ける。しかしそれも彼にとっては慣れたもので、さらに彼女を苛む責め苦を強くしていく。吸い上げてさらに大きさと感度を増した花芽に、彼は軽く歯を立て、決定的な刺激を与えた。

「ひっ、あっああ——っ!!」

ビクビクッと彼女の全身が激しく跳ね、うねりながら収縮した臍が内から迫り上がる圧力に耐えかねて、熱い蜜をほとぼしらせて。そのまま彼女はぐったりと脱力し、胸を大きく上下させて乱れた呼吸を繰り返している。

顔を上げた当麻は彼女が放ったものでベタベタに汚れた顔を手で拭き、近くの棚の奥に手を伸ばそうとしたが、その動きは緩慢に腕を持ち上げた美琴により止められた。

「美琴？」

怪訝に思っただけで彼女を見遣るが、頬を朱に染めた彼女は視線を合わせることもなく、早口で呟く。

「きよ、今日は大丈夫だからっ、あのっ、は早くすればいいいでしょ!」

当麻の腕を掴む彼女の手が震えている。どうやら恥ずかしくてしようがないのを我慢して口にしていらしい。

彼はそんな彼女をどうしようもなくかわいく愛しく思いながらも、その心情とは逆に口元に人の悪い笑みを乗せた。

「へえ？ 美琴ちゃんはそんなに早く俺のを挿れてほしいんだ？ しかもナマで？」

「——っ!」

美琴の目元が泣きそうに歪むのを見て、当麻の口から思わず笑い声が漏れる。

もつと言葉で苛めてやってもいいが、これ以上はとうに限界

まで膨張している当麻自身ももちそうにない。ならば、言葉よりも行為で直接的に苛めてやるのも悪くないだろうと、意地悪なことを考える。

彼は素早く着衣を脱ぎ去ると、いまだに仰向けで脱力している美琴の上に覆い被さるようにして、かすめ取るようなキスをする、猛る肉棒を彼女の熟れた秘裂に押し当て、そのまま腰を侵入させた。

「あうっ!」

「くっ」

一度達しているとはいえ、張りつめた男性器を、内壁を拡張られることなくいきなり受け入れるには彼女の秘部は狭く、先端を潜り込ませた彼の性器をきつく締めつけている。

「美琴。いいコだから力抜いて、な？」

当麻は先ほどまで苛めてやろうと思っていたのが信じられないほど優しい声で囁き、彼女の腕を自分の首に回させると、自分はその目元を拭き、髪を撫でた。

彼の言葉に応えるように、彼女は当麻に縋りつき、わずかに身体を抜いた。

それを合図にして、当麻は美琴の腰を掴むと、自らの猛りを彼女の最奥まで潜り込ませた。彼女の悲鳴ともつかない嬌声が耳を衝いたが、そのまま入口付近まで引き抜いては再び最奥まで犯す。腰を打ちつける衝撃を受け止める細い身体がベッドを軋ませ、シーツに深い皺を刻んでいく。

「と、ま。と……まあ……!」

掻き回される水音と激しく肌を打つ音との合間に、彼の名を呼ぶ声が聞こえる。その泣きそうながらも甘く濡れた呼びかけに、当麻の全身の血液が栗立っていく。舌足らずな幼い口調で一心に彼を求める様子もかわいらしい。

彼は息を呑むと、注挿の速度を上げた。

時間がないから急がなくてはいけないという理由以前に、当麻自身がこんな美琴を前にして我慢などしていられるはずなかった。

激しく呼吸を乱す当麻は、美琴の腰を高く持ち上げると真上から押し掛かるように内側を抉った。彼女の奥の奥まで暴こうと、狭くしかし不思議と絡みついてくる内壁を激しく蹂躪する。許しを乞うように、当麻の首に回された腕に力が込められ、ひっきりなしに上げられる嬌声にすすり泣きの声が混じる。快楽に頬を火照らせながらも頼りない表情で縋りついてくる美琴を見下ろし、当麻の奥で何かがどくと脈打った。

「み、こと」

それは突然発生した巨大竜巻のように彼の理性も思考も感情もすべてを巻き込み、ただひたすら目の前の少女に向かう。

荒れ狂った当麻の注挿に、美琴の目が瞠られる。

「ひう、あつ、いたつ、……ま、と……まあつ！」

極まった美琴の爪が彼の首に傷跡を残したが、否応なく快樂の奔流に呑み込まれている彼はそれでも腰を打ちつける力を緩めようとはせず、咽び泣く美琴の秘穴を穿ち続けた。泡立った蜜が押し出され、彼女の背に伝っていく。

不意に、抗いがたい大波が彼の下半身を襲い、彼は彼女の身体が逃げないように強く抱き込むと、その欲望のすべてを彼女の最奥へと解き放っていた。

時刻はもうそろそろ日が沈もうという頃合い。

特有の食欲を誘う匂いを漂わせる皿に豪快にスプーンを突っ込みながら、どこか落ち着かない様子で当麻がそんなことを口にした。実はずっと気になっていて、いつ口に出そうかとタイミングを見計らっていたのだが、そんなことはおくびにも出さないさりげなさを装って美琴の返事を待つ。

一応、世間的にはお付き合いしているといえなくもない間柄なわけだし、少しでも長く一緒にいたいと思うのは当然な心情の動きだと思うのだが、わざわざそれを言葉にするのも憚られる。今でこそこんな仲だが、出会いはお世辞にもロマンティックと言えやしないものだったし、それ以降もなぜか付きまとわれてことあるごとに勝負しろと言われ続けていれば、二人の間に甘さなど実に今さらな雰囲気だった。

しかしそれでも長く一緒にいれば情が湧いてくるし、実際当麻に見せられるいろいろな美琴をかわいと思う。だから当麻としてはできればもっと美琴を自分の傍に置いておきたいのだが、そうもいかない事情が彼らにはある。

彼女の通う常盤台はお嬢様学校として有名で、その分規律も厳しい。校内での行いはもとより、寮内での行いに至るまで、何かと制約が付きまとうのだ。門限しかり。

だからこそ、彼は美琴を時間をかけてじっくりいたできたかったところをぐっと堪えてファーストフードで即行平らげたというわけだ。

緊張して答えを待つ当麻の耳を打ったのは、しかし意外にあっさりした言葉だった。

「いいのよ。外泊届出してあるし」

カレーを口に運びながらこともなげに言い放つ彼女の様子に、彼は持ち上げかけていた手を途中で止めて呆気に取られた。

「お前、門限とか厳しいんだろ？　こんなにゆっくりしていいんか？」



外泊届。ということはべつだん急ぐ必要もなかったというわけ。短い逢瀬だと思っていたから想いを乱暴にぶつけるような行為に至ったわけだが、その実、時間ならたーっぷりとあったのだ。

なんだ、そうだったのかと理解すると思わずニヤけてしまう。口元がだらしなく緩むのを、当麻は掌を当てて隠した。

我ながら現金だと思うが、今夜はずっと美琴が自分の傍にいと考えれば、それは素直に嬉しいのだ。

けれど口は照れ隠しに言葉尻に意地悪さをにじませる。

「ふーん、じゃあ最初っから俺の部屋に泊まるつもりで来た、と？」

「なっ」

当麻の言葉の意味に気づいて、美琴はうろたえて頬を朱に染めた。そんなかわいらしい変化すら、今は完全に点ってしまった当麻の欲望を煽るばかりだ。

「……え？ 当麻？」

いつの間にか傍らにやってきていた当麻を美琴がわずかに口元を引きつらせながら見上げる。

「なんだ。そういうことなら、無理に早く終わらせる必要なかったんだな」

「え？ 当麻？ ……ふえっ!？」

一瞬美琴の視界がぐらりと揺らいだかと思うと、椅子に座っていたはずの彼女の身体はいつの間にか当麻によって持ち上げられていた。かと思うと、そのまた一瞬後にはベッドの上にゆっくりと落とされたのだ。自分が置かれた状況をいまいち理解できずに目を瞬いている彼女に彼は有無を言わせぬ満面の笑みを向けた。

「え？ あの？ 当麻？」

「最近あんまり構ってやれなかっただろ？ ま、遠慮すんなって話」

完全にスイッチの入った当麻が美琴に覆い被さる。

混乱した彼女はわたわたと慌てるが、次々と降りてくる当麻の唇を拒もうとはしない。その様子から嫌がっていないのは明白で、それに気を良くした彼がかわいらしい桜色の唇を舐め、そのまま耳朶を甘噛みすると、彼の下から小さな甘い嬌声が聞こえた。その響きで、彼は美琴の内にも熱が点つたのを悟ってほくそ笑む。

「えっと、当麻？ まだするの？」

「当然！」

涙目で見上げてくる美琴にきっぱり言い切ると、早速とばかり彼女の発展途上の乳房を鷲掴みにした。彼女の頬が瞬時に染まる。それでもやはり、拒むつもりはないらしく、彼女の手は恥じらうように当麻のシャツの端を掴んだ。

そして、最後の抵抗とばかりに上げられようとした「アンタのどこが不幸なのよ！」という叫びは、ぴたりと合わされた当麻の唇によって完全に奪い去られたのだった。

◇最後までお疲れ様でした、りんご紅茶の2月かずおです。

◇本当はもっと早く出したかったのですが、色々あったので今頃です。今回、絵柄の調整をしたつもりだったのですが「ハヤテのヒナさんと顔が一緒」だと鷹宮嬢に突っ込まれたのでもう一回調整して出直します・・・。

◇なんか「乳のあるキャラ描こうぜ！」という話になっているのですがレールガン以外で気になってるキャラを上げていったら全員貧乳でした！！どうしましょう？あ、オリジナルで携帯用電子書籍を描かせて頂いたのですが最初に貧乳設定でプロット出したらどうしても巨乳にしてくれと言われたので巨乳です。カラーでマンガを描き慣れてないので死にましたよ。しかも、カラー原稿は誰も手伝ってくれません・・・。

◇とりあえず、何冊かはレールガン本を出す予定なので巨乳のコトは忘れます！では。また別の本でお会い出来ると嬉しいです。

◇ 目 次 ◇

P 3～	「ビリビリミサカ」	2月かずお
P 24～	「とある土曜の昼下がり」	鷹宮沙玖羅



「ビリビリミサカ」

発行：りんご紅茶

発行日：2009年12月29日

URL：<http://www17.ocn.ne.jp/~ringoame/>

メール：futatuki@hotmail.co.jp

印刷：大陽出版様



りんご紅茶
ADULT ONLY